

< 研究ノート >

日本語教育実習報告

日本人大学生と台湾人大学生との ディスカッション活動を中心に

金久保紀子 亀田千里 塚原真紀

A Report of the Practice Teaching of Japanese Language Education
Focused on Discussion Activity between Japanese Students and Taiwanese Students

KANAKUBO Noriko KAMEDA Chisato TSUKAHARA Maki

Abstract

The purpose of this report is to discuss about the result of the third practice teaching, held at Tsukuba Women's University in the summer of 2001. Japanese students and Taiwanese students had an activity to discuss about handicapped people in Japan. Through the experience to plan every activity, Japanese students could learn how to construct activity for foreigners. Taiwanese students could use Japanese in actual communication with Japanese and it was effective to know Japanese present situation through real experience. This report shows that this kind of activity is useful to develop their skill to teach and learn Japanese.

キーワード：日本語教育実習 日本人大学生 異文化 ディスカッション活動

1. はじめに

「日本語教育」は日本人かそうでないかに関わらず、日本語を母語としない方を対象とした、外国語教育である。日本人を対象とし

た「国語教育」とは本質的に異なった面を持っている。「日本語教育」の現場においては、常に学習者の文化と日本の文化の接触があり、絶えず「日本文化」と「異文化」を意識する。

かつての「日本語教育」では、日本語そのものを教育するのが主たる目的であり、日本文化を積極的に扱わないような風潮もあったかもしれない。現在では、日本語教育における異文化、あるいは異文化理解を学習者の背景、年齢、などから多角的に考えようという方向が見える(石田1995)。日本の文化や事情を効果的に教育の現場に持ち込むことで、日本語の習得の促進、また留学生の場合は、日本社会への適応という効果があるという考え方が一般的であろう。

一方、川上(1999)は外国語教育における文化のとらえ方が固定的であることを問題点として指摘し、日本語教育の中の日本文化、あるいは「日本事情」¹⁾科目の中での日本文化の内容と方法論の「バージョンアップ」(川上(1999, p.23))が必要であると強調している。

日本語教師養成に目を転じると、文部省が1985年に示した「標準的な教育内容」が見直され、多様化する学習者に対応できるような人材を育てることを目的として『日本語教育のための教員養成について』(2000)が発表された。今後はこの報告書が教師養成に大きな影響を与えられ考えられる。報告書によると、日本語教師のための新たな教育内容は「コミュニケーション」能力を核として構成されており、「日本語教育とは、広い意味で、コミュニケーションそのものであり、教授者と学習者とが固定的な関係ではなく、相互に学び、教えあう実際的なコミュニケーション活動と考えられる」(同報告書, p.9)としている。具体的には、教師養成カリキュラムの弾力化と実践面の強化を促す内容となっている。

実践面の強化として、注目されるのは日本語教育実習の扱いである。教育実習は、現在までのところ、いわゆる教職課程のように細かな規定はなく、大学の状況に合わせて行わ

れてきた。民間の日本語教育機関と連携するタイプ、学内の留学生に協力してもらうタイプ、海外の教育機関へ日本人学生が行って実習を行うタイプ、海外から学習者を招くタイプなど様々である。また、日本語教育実習の一般的な問題点として、1)職業としての日本語教師を目指している学生とそうでない学生の混在、2)実践的な場の確保が困難、3)卒論、就職活動などとのバランスなどが挙げられる。特に1)の問題点は大きく、毎年、教育実習指導の際に頭を痛めることになる。

筆者らは1999年以来、大学の日本語教師養成プログラム担当として日本語教育実習を指導してきた。私立の女子大学で、規模も小さいため、県内出身の学生が多く、年に1名、2名程度しか日本語教師を志望していないような状況にある大学では、実習の目的を「日本語を教える、あるいは日本の何かを紹介することを通して、学習者と体験を共有すること」(金久保(2000))と設定している。この実習で想定している日本語教育は、必ずしも日本語学校や大学などの教育機関での教育だけではない。各地で盛んに行われている地域のボランティア活動への参加、あるいは外国人との地域共生が進むにつれて将来、必ず外国人と接しなければならないことを想定し、そのための実習という点を重視している。「文化」というものの扱いが、日本語教育の中で活発に議論されていることもあり、どのような内容が実習において「文化」としてふさわしいのか模索しながら、進めてきた。

2001年度に実施した実習では、実習生である日本人が学習者となった台湾大学生と、日本の障害者について、地域の施設に協力を仰ぎながら共に考える活動を行った。本稿では、その活動を紹介し、分析することで、日本語教育実習における新しい「文化」の扱いについて考察することを目的とする。

2. 実習の概要

当大学の日本語教育実習は、1999年度の初めての实習以来、国立台湾大学の日語・日文学系の学生を対象として実施している。台湾大学自体の歴史は古いが、日本語を専攻できる学部は比較的最近設置された。毎年、10名前後の学生（1年生修了～3年生修了学生）が来日し、10日ほどの日程で、教壇実習、文化的な実習、交流活動などを実施している²⁾。実習は事前指導、事後指導が行われ、2単位が与えられる。実際は前年度末から指導・準備を進行している。

2001年度の実習は以下のような日程・規模で実施された。

日 程：2001年7月11日～19日

参加者：実習生 女子31名

（日本語教育に関する他の科目を履修し終えた4年生）

学習者（台湾大学生）女子11名（2年生6名、1年生5名）

指 導：金久保紀子 亀田千里

実習助手：塚原真紀

3. ディスカッション活動の試み

3.1 活動の趣旨と内容

過去2回実施した台湾人学生を対象とした日本語教育実習の反省から、台湾人側が日本の若者文化を中心にした音楽、芸能などに関する日本側の情報を豊富に持っていることはわかっていた。しかし台湾人学生が理解している日本文化というものは、非常に流行色の強い、また台湾にはない色彩への単純な興味といった印象が強く、台湾にも日本にもある日常的な事柄へ目を向けるといった方向性は持っていないことが明らかであった。また、実習生である日本人学生は、短期間の実習で所定の内容を消化しよう、という意識を強く持ちすぎる傾向があり、非常に浅い文化紹介活動しか行えないことへ不満を持つ学生も多く見受けられた。十分に台湾人学生の反応を

表1 2001年度日本語教育実習 スケジュール

日時	内 容	日時	内 容
7/11 水	開講式 オリエンテーション 実習A 自己紹介活動 実習B ビデオ作成①	7/16 月	実習I 浅草① 実習J ビデオ作成④ 実習K ディスカッション③ 視覚障害者体験 話し合い
		7/17火	実習L 浅草③
7/12木	実習C カルタ① 実習D ディスカッション② 実習E ビデオ作成② 実習F ディスカッション② 筑波技術短期大学 見学	7/18水	実習M カルタ② 実習N ビデオ作成⑤ 発表準備
		7/19木	発表準備 実習発表会 閉講式
7/13金	実習G そば打ち 実習H ビデオ作成③		
	ホームステイ		

くみ取れない、また、活動後にフィードバックする時間的な余裕がないことも問題点として指摘されていた。

さらに、台湾人学生および台湾大教員からも、テーマの難しさには問題はないので、内容を十分に理解できるような構成に配慮してほしいとの要望が寄せられていた。

そこで、実習の準備をするのにあたり、まず「ディスカッション活動」という枠を決め、希望者が参加するように指導した。実際に参加した実習生は6名であった。今年度の実習では以下のような方針の元、台湾人学生との実習に取り組んだ。

- ・日本にも台湾にもある社会的な事柄を取り上げる
 - ・インターネットなどを利用し、実習前の情報交換を密に行う
 - ・実習を通して常に、テーマについて話し合うことが出来、その話し合いを深化できるように内容を組み立てる
 - ・具体的に体験できるような内容にする
- 実習生たちは、つくばという地域の特性、

実現可能性などを中心に話し合い、また台湾を訪問したことがある教員や、学内にいる台湾人留学生からの情報も参考にし、「障害者」というキーワードを持つに至った。また、このテーマであれば何かしらのディスカッションが可能であろうといった非常に漠然とした予想があったことも指摘しておきたい。

具体的な準備としては、台湾における「障害者」の実状を調べて来るように電子メールを使って依頼し、同時に実習生たちも台湾や日本のホームページを調べ、どのような分野が適当か、あるいは日本語の問題として台湾人学生に導入しておくべき語彙の収集を行い、教材を作成した。さらに来日直後、障害者との接触の有無、知っている用語（車椅子、手話、バリアフリーなど）、障害者に関わる経験などについての簡単なアンケート調査を実施した。

実習期間中、この活動に割ける時間は合計で7時間であったので、内容を表2のように配分した。

実習後、全体の活動の評価、感想を記入す

表2 ディスカッション活動の時間と内容

時 間 数	内 容
授業① 1.5時間	テーマの導入 台湾・日本の障害者事情についての発表 ビデオ、写真を使っての用語の導入 2班に分かれ話し合い 今までの障害者に関する経験、意見をまとめる 発表
授業② 2.5時間	筑波技術短期大学視覚部 ³⁾ 訪問 施設見学 大学教官からの説明 質疑応答
授業③ 3時間	障害者体験 白杖、車椅子など つくば市社会福祉協議会の方による説明 体験についての話し合い まとめ 感想文作成

る用紙を配布し、回収した。また台湾へ帰国後、活動で扱った内容をもとに、周囲の台湾人への取材や話し合いを求める指導を行った。

実習は、教室側がマジックミラーになっていて指導者他観察者がいる部屋が見えないような構造になっている教室を基本的に使用し、全体をVTRに記録した。

3.2 活動の様子

実習中の様子について、特に日本人実習生と台湾人学生それぞれの反応とインターアクションを中心に述べることにする。また実習後の評価も参考にする。

<授業①>

事前に周知しておいたテーマであったことから、テーマに関する混乱はなく、授業の進行はスムーズであった。授業前に行ったアンケートの結果から、実習前に予想していたより台湾人学生が障害者について知識を持っていることがわかっていたが、班に分かれての話し合いの中で、台湾での障害者の様子が徐々に実習生に伝わっていった。例えば、乙武洋匡氏の本が台湾でも紹介されており、かなりの読者がいること、障害者枠の進学あるいは就職が可能であること、点字ブロックは存在するが違法駐車のパイクなどがあってあまり機能していない、政府の対策の遅れを具体的に指摘する意見があることなどが日本人には新しい情報であった。

日本人実習生はこの段階ではまだ「指導しよう」という意識が強く、台湾人学生はまだ馴染みのない用語を使うために四苦八苦している様子が全体的に観察できた。また日本語力についても学年によって差があったため、十分に自分の意見を言えない台湾人学生もいた。さらに、実習二日目であったため、実習生と台湾人学生との慣れが足りず、話し合いにぎこちなさが目立った。また大量の日本語を聞き、話すことを要求された台湾人学生に

とってはかなりの負担がかかったようで、授業の後半は集中力を欠いたような行動も見られた。

この授業の目的は午後の授業に向けてのウォーミングアップにあったが、台湾人学生には「健常者である自分たちが、なぜわざわざ日本へ来て障害者をテーマに話し合いをしなければならないのか」といった疑問があり、テーマそのものへの不信感のような感情があったことが授業の評価用紙から見て取れる。

<授業②>

同日の午後、会場を筑波技術短期大学（以後、技短）に移し行われた。技短の先生による大学の基本的な説明の後、ご自身も全盲という先生による視覚障害者の現状に関する講義を聴講した。

昼食後他の内容の実習をし、さらに会場を変えたことにより台湾人学生の気分転換が図れ、授業の際の不信感をあまり引きずらずに授業に移れたようである。また全盲の先生が大変器用に機器を用いながら説明する姿に感銘を受けた台湾人学生、日本人実習生双方がかなり真剣に先生の説明に聞き入る様子が観察できた。特に、先生が台湾国内の障害者事情に詳しく触れた部分は、集中して聞き取るうとする姿勢が見受けられた。さらに、講義で使われる日本語が非常に平易、明瞭で、かつ言い換えなどが頻繁に行われ、台湾人学生には理解が容易であった。

講義後の質疑応答の際は、台湾人学生が自分の高齢の家族に関する悩みの相談をする場面もあり、徐々に身近な問題としてテーマを受け入れて来た様子が伺えた。日本人学生にとっても、自分たちの説明不足、認識不足を確認することができたようである。この授業の目的は、特に視覚障害について知識と認識を深めることにあったが、その目的は十分に達成できたと言える。

この授業中、問題点として挙げられるのは、説明・講義を受ける際の机の配置、実習生と

台湾人学生の椅子の位置である。細かな点ではあるが、互いの顔が見えず、また気軽に質問が出来ない配置は双方向の活動を制限した。

活動後の評価からは、視覚障害者へ配慮が行き届いた施設と障害者に対する質の高い教育への素直な驚きが見て取れた。全盲の先生のわかりやすい講義についてのコメントも多かった。一方、先駆的で目新しい施設・設備を見学したことについて「おもしろかった」という感想が多く、何をもって「おもしろい」と評価するのか分からないという意見を持つ実習生もいた。

<授業③>

つくば市の社会福祉協議会から2名の職員が実習に参加し⁴⁾、白杖の使い方、ガイドする際の注意、車椅子に乗る際・押す際の注意などについて実習生・台湾人学生が説明を受けた。その後、大学近辺の歩道を移動する体験をそれぞれが行った。

白杖、車椅子など具体的な器具を前に、台湾人学生が積極的に手を出し参加する様子が見られた。子供のようにふざけて器具を扱い実習生から注意される場面もあった。また、社協の職員の話す日本語が台湾人学生には難しかったので、あまり集中して説明を聞くことができなかった。実習生は周囲への配慮などに気を取られ、台湾人学生と話しながら体験をすることがあまりできていなかったようである。

体験後、総括的に活動内容を振り返る時間が取られた。「実習をまとめよう」という意識を持つ日本人学生と、先ほどの体験について「車椅子がおもしろかった」「目が見えないと怖い」という感想を持つ台湾人学生との間に、その時間の使い方について解釈のギャップがあったように見えた。さらに、最終的に冊子を作成するために、活動全体についての感想文を書く時間を取った。実習生がまとめの話をしようと話しかけると、台湾人学生

は実習生と話しながら作成することができないということで、静かに作文を書くという時間が必要となった。実習生にとっては、「まとめ」と言える時間が短くなってしまったことが不満として残った。

授業後の評価では、「テーマが難しかった」という意見が多く、次いで「車椅子・白杖がおもしろかった」という意見が目立った。実習生にとって授業のねらいは、今までの授業で得た知識やイメージを、実際に体験することでさらに身近なこととして感じる、あるいは障害者を取り巻く環境整備の大切さを感じる、などにあったが、台湾人学生にとっては単なる体験でしかなかったのか、判断が難しいところとなった。

<まとめの冊子>

実習生と台湾人学生が協力して、最終的に冊子を作成した。その中には話し合いの経緯、アンケートの結果などが詳細に載せられている。また授業の時間内に書いた台湾人学生の感想文、また実習生の感想文も収められた。

台湾人学生の感想は、1)台湾と日本(つくば)の障害者環境の差、2)障害者に関する自分の無関心さへの気づきと反省、3)今後の課題、の3項目に関する記述が目立った。感想文としての体裁を整えるためかどうかは不明であるが、「よい経験」と結んだ学生も多かった。一方実習生の感想には、1)テーマの難しさ、2)内容提示の難しさ、3)障害者に関する自分の中の気づきに関する記述が多く、台湾人学生とはかなり差があった。

4. まとめ

今回の活動を分析してみると、活動として考慮すべき点、さらに双方への教育的な観点からの問題点がいくつか明らかになった。

活動過程で実習生が戸惑った大きな問題として、実習生が想定していた学習者と台湾人学生の学習スタイルが異なっていたことが学

げられる。例えば、体験後話し合いをしながらまとめを行いたいと考えていた実習生が台湾人学生の意見に従って、静かに待っていないければならない場面があった。まとめるということ、話し合うということにどのような感覚を持っているのかなどを事前に把握する必要を感じた。

次に、このような活動に専門家を利用するという点について考えてみたい。今回は学習者が外国人であったので、専門家の話す日本語を理解する力があるかどうかは問題ではあったが、全体として活動を活性化するために、さらに障害者の専門でない実習生の足りない部分を補うためには非常に有効に働いたと考えられる。

日本語の問題として、台湾人学生が言った日本語の意見が本当に正確に本人の意図することを表していたのか実習生は疑問として持っていた。この点を解決するには、活動の時間を伸ばす、語彙の指導をさらに行うなどの措置をとらねばならず、今後の課題となる。

重要なのは、テーマ設定である。実習生・台湾人学生双方がそのテーマについて話し合いを持つことの意義をどう考えるのか、という点はこのような活動の際には重要なポイントになってくる。社会的・文化的な背景が異なるのであるから、当然そのテーマへのアプローチには差があることになるが、その差をどのように集約していくのかが互いに見えるようなテーマでなければ、活動そのものへの動機を保つことが困難であると思われる。またテーマと自分の距離感も考慮に入れる必要がある。

ある程度完結した内容を持つべき実習という教育形態では、活動後、達成感を持たせることが必要であろうが、今回のような社会的なテーマの場合、大学生レベルの学習者に単純な達成感を持たせることは非常に難しい。外国語学習という観点からすると、難しいテ

ーマについて話し合いが出来た、ということで達成感を感じることができであろう。しかし、今回のような活動の場合、むしろ双方の学生にとって、外国人とある時間と体験を共有したことで達成感が生まれてくるのではないだろうか。実習ということで、指導する側と学習する側という2つの立場に固定されることが多いが、今回の活動はある部分では固定的な関係が崩れていた。過去の実習と今回の活動の比較から、単なる日本紹介的なテーマでは双方向的な作用は生まれて来にくく、ある程度込み入った内容の方が適当であると言える。

実習生にとっては、外国人である学習者に配慮して活動全体を計画し、コーディネートする経験を持つことが出来た。外部の機関との折衝、必要な道具、機器の管理など、このような機会を与えないと、なかなか経験することが難しいのが実状である。

日本語教育における学習者と日本語教師の相互作用を重視する方向になったことを受けると、このような活動の経験を持たせることには意義があると言える。岡崎(2001)でも報告されているように、教師養成の現場には、日本語を教える活動だけでなく、もっと積極的に日本語を使った活動が導入されてもよいのではないと思われる。日本語を使った活動を効果的に日本語教師がコーディネートすることができれば、日本語学習者がより円滑に日本語でのコミュニケーションができるようになるであろう。

今後も、学習者の日本語レベルとテーマの関係を考えながら、話し合いと体験的な活動のバランスの取り方、活動形態と実習生・学習者の位置関係など、さらに実習において実践し、具体的に考えていきたい。

[註]

- 1)「日本事情」とは、主に大学で留学生を対象

として行われている一般日本人が教養として持ち合わせているような内容（歴史、文化、政治、経済など）を扱う科目を指すことが多い。最近では川上（1999）のように「日本文化」そのものを「日本事情」と呼ぶこともある。

- 2) 詳細は金久保（2000）、金久保（2001）に報告されている。
- 3) つくば市内にある、視覚障害者を対象にした国立の短大。他に聴覚部がある。
- 4) つくば市社会福祉協議会には、職員の派遣、白杖・車椅子などの貸し出しなど障害者疑似体験ができるようなシステムがある。

[参考文献]

- 1) 石田敏子『改訂新版 日本語教授法』大修館書店1995
- 2) 岡崎眸「多言語・多文化社会を切り開く日本語教育」『大学日本語教員養成過程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究報告書』2001日本語教員養成課程調査研究委員会 pp.161-186
- 3) 金久保紀子「副専攻日本語教師養成コースにおける日本語教育実習のあり方」『東京家政学院筑波女子大学紀要』2000第4集東京家政学院筑波女子大学pp.143-154
- 4) 金久保紀子「第2回日本語教育実習報告」『東京家政学院筑波女子大学紀要』2001第5集 東京家政学院筑波女子大学pp.117-124
- 5) 川上郁雄「「日本事情」教育における文化の問題」『21世紀の『日本事情』 - 日本語教育から文化リテラシーへ』1999創刊号 「21世紀の『日本事情』」編集委員会 pp.16-26
- 6) 縫部義憲「日本語教師の成長カリキュラム」『大学日本語教員養成過程において必要とされる新たな教育内容と方法に関する調査研究報告書』2001日本語教員養成課程調査研究委員会 pp.21-27
- 7) 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議『日本語教育のための教員養成について』2000文化庁